「神護寺展」に寄せて

藤原　道夫

旅人にとって、神護寺は京都駅から遠く山深い所にあるように感じる。そこを何度か訪ねたのは、紅葉が美しいと聞き及んだから。しかし紅葉にはツキがなかった。ある秋にはもみじの葉がめくれて枯れたように色がくすんでいたし、別の秋には前夜の風雨で大部分の葉が散っていた。

５月初旬に訪ねた時のことはよく覚えている。京都駅からバスに乗って約１時間、停留所高雄で降りた。そこから谷へと下り、清滝川に架かる朱塗りの橋の袂に出る。急な谷の斜面に一本の山藤が多くの花をつけているのが見えた。新緑が目に染みる。橋を渡りながら聖域に入って行く気分が高まる。石段をひたすら登り、山門にたどり着いて一休み。広い境内に人はまばら。奥に進んで右手の石段を登り、金堂の中に入って薬師如来立像（国宝、平安時代、木造）を拝観した。朱の入った唇は分かったが、いかつそうな尊顔と全体像がよく分からない。多分暗順応ができてないうちに去ってしまったのだろう。

７月半ばから東京国立博物館で「神護寺展」が開かれ、早々と見に行った。ちらしに「1200年の至宝集結」とあり、展示品の多さに驚く。私の関心は寺外初公開となる薬師如来立像。密教世界を顕す両界曼荼羅は美術品として貴重なのだろうが、どうにも心が動かされない。密教は秘密の中にあり、どうにも馴染めない。

最後の展示室でやっと目当ての像に出遭えた。それは黒っぽい等身よりやや大きく重量感あふれる造りで、唇の朱がひときわ目立つ厳しいお顔立ちだ。衣の襞の彫が見事。彫像として傑作に違いないが、気安く病気平癒を祈願する気になれそうもない。密教が染みついていそうな雰囲気が漂う。両脇侍の日光・月光菩薩（重要文化財）はお粗末な造り。

これまでに多くの薬師如来像を拝観してきた。そんな中で薬師寺の像が格段に美しい。新薬師寺では本像よりも十二神将に人気があるよう。浄瑠璃寺の三重塔内に祀られている秘仏薬師如来坐像（重要文化財）は、開扉日に行ってもよく見えなかった。この像も同じ博物館に展示され、明るみの中にきりっとしたお姿を拝見できた。今回「神護寺展」に出かけて現地でよく拝見できなかった薬師如来立像に再会し、全貌を拝観した。もうあの遠い寺を訪ねることはあるまい・・・。あれこれ思い巡らせながら博物館を後にした。